

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

岸田劉生美術思想集成

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE 岸田劉生美術思想集成
うごく劉生、西へ東へ
【前篇】異端の天才
書肆心水刊
Shi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

前篇（異端の天才）目次

I

歩み	14
ゴオホとゴーガン	19
ヴァン・ゴオホの絵	28
自分の行く道	37
自然	43
旧フュウザン会展覧会を見て	49
一生の仕事、その他	56
今の自分の仕事	72
今の自分及び自分の仕事に就いて雑感	79
才能及び技巧と内容に就いて	92
言つて置きたい事少し	102
自分達の展覧会	112
装飾文字に就いて児島氏に	116
今後の日本の美術に就いて	136
装飾文字に就いて	140
想像と装飾の美	170

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

新年に際して画壇に

製作余談

II

劉生画集及芸術観	序文
美術
内なる美
美化
自然の美と美術の美
裝飾論
写実論
素描論
色彩論
美術と道徳
クラシックの感じ
内容と技巧
美と奇麗事のちがい
自分が近代的傾向を離れた経路
画を描く時
僕の行方

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

アカデミックになる事は.....
質料と美.....
僕によりて見出された道.....
自然にたよれ.....
葱 煙.....
力.....
自分の踏んで来た道.....
或る画の裏にかいた詩.....
描きすぎるという事.....
画家になるには何が必要か.....
摸倣は必ずしも悪い事ではない.....
摸倣と摸写.....
僕は摸倣を是としたが.....
作画要訣.....
表現と構図.....
日本の或る若い画家達.....
個人とこの世に就いて.....

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

後篇（「でろり」の味へ）目次

I

製作余談

六号雑筆

製作余談

東洋芸術の「卑近美」に就いて

写実の欠陥の考察

個人展覧会に際して

デカダンスの考察

彩管余語

アメリカ趣味とセセッション趣味を排す

美術上の婦人

第九回展覧会に際して

閑雅録

一画工として

一工人としての生活の中に

出品画について

東西の美術を論じて宋元の写生画に及ぶ

私の日本画に就いて

美術雑感

画工雑言

美術と支那の雑感

浮世絵雑考

ブレーク

初期肉筆浮世絵

旧劇美論抄

抄

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

岸田劉生美術思想集成

うじく劉生、

西へ東へ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

- 一、底本には岩波書店版岸田劉生全集を使用した。配列は、単行本の抄録部分（各巻の第Ⅱ部）を除き、発表順とした（初出一覧は後篇巻末に掲載）。
- 一、原文は旧仮名遣いであるが、本書では新仮名遣いで表記した。片仮名語については仮名遣いの範囲をこえて現代的な表記に統一したものがある（オリジナリティ→オリジナリティ、ミスチック→ミステイック、など）。歌や句の類は元の仮名遣いのままとした。踊り字（繰り返し記号）は「々」のみを使用した（二の字点は「々」に置き換えた）。
- 一、底本のルビはいらすもがなと感じられるものもそのままにした。読みのルビは適宜付加したが、読みがいく通りがある場合や不確定な場合には、（一）で括り、最も一般的あるいは分かりよいかと考えられる読みを記した。
- 一、「味い」「少い」「明に」「戦のく」など、送り仮名の過不足を現代風に調整したものがある（固有名詞はそのまま）。
- 一、現今不自然に感じられる句点遣い（例えは「ロダノ。ゴーホ。セザンヌ。ゴーガン。マチス。の諸芸術家」のような表記）を読点に、同じく現今不自然に感じられる読点遣い（例えは「ヴァン、ゴオホ」）を中心黒点に置き換えた。日付数字の間も中黒点つなぎに統一した。
- 一、「にさんにち」と読むべき「二三三日」など、読みやすさのために読点を付加したところがわずかにある。なお、原文には一句読点の使用と「てにをは」が整っていないところが少なくないが、削除・変更はしていない。
- 一、原文の正誤を判断しかねる場合やあえて直すまでもなからう場合などに原文のままの意で使用する「ママ」のルビは丸括弧でくくり、□□のように記した。恐迫（→強迫？）、対照（→対象？）の類には一々「ママ」とは記していない。
- 一、通用する漢字同士の関係にあり、かつ現今一般的でない用字であるものを、現今一般的な用字のほうに置き換えた場合がある（例えは、落ち著く→落ち着く）。
- 一、少数例ながら、現今一般的に「——」が使用されるところで「——」が使用されている場合、それを「——」に置き換えた。
- 一、現今一般に漢字表記が避けられているものは平仮名表記に置き換えた。置き換えたものは五十音順に次のとおり。送り假名と活用形は代表例のみを示す。雖も（いえども）、所謂（いわゆる）、印度（インド）、各（おのの）、嘗て（かつて）、可成り・可なり（かなり）、基督（キリスト）、蓋し（けだし）、此処（ここ）、悉く（ことごとく）、此の（この）、之れ・此れ・是れ（これ）、撫（さそ）、扱て（さて）、而も（しかも）、屢々（しばしば）、已に（すでに）、其処・其所（そこ）、其の（その）、其れ・夫れ（それ）、度い（度い）、啻に（ただに）、忽ち（たちまち）、因に（ちなみに）、独逸（ドイツ）、兎角（とかく）、兎に角・兎にかく・とに角（とにかく）、兎も角・とも角（ともかく）、俱に（ともに）、乃至（ないし）、猶（なお）、乍ら（ながら）、為す（なす）、巴里（ベリ）、只管（ひたすら）、可し（べし）、益（ますます）、亦（また）、寧ろ（むしろ）、若し（もし）、稍・稍々（やや）。

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

前
篇

異
端
の
天
才

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

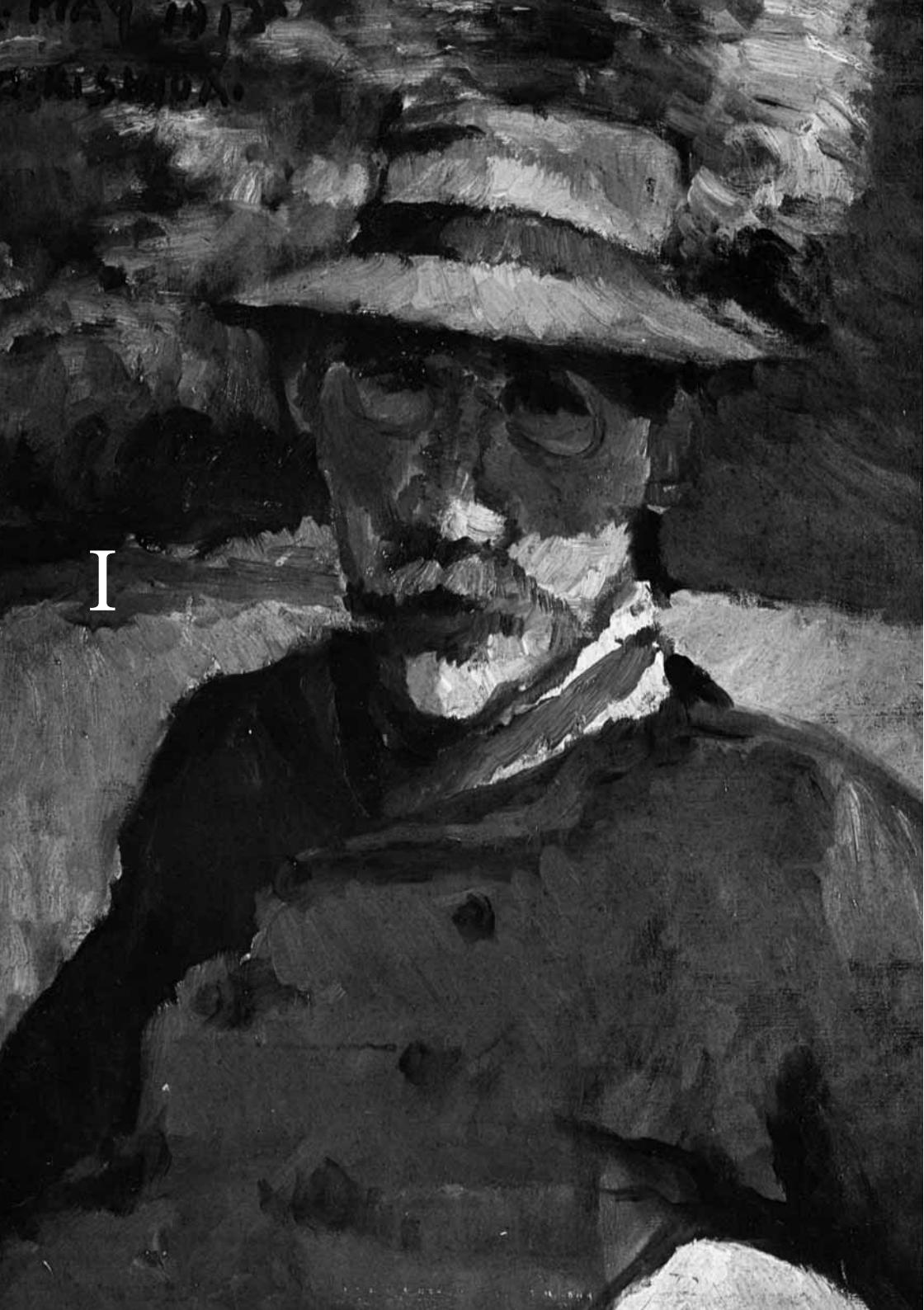
SAMPLE

Shoshi-Shinsui.com

本巻には劉生二十代のものを収める

(
著者
印)

I



歩
み（感想）

自分は歩みつつある。少しでも止まると不安である。耐えられぬ程不安である、自分が止まって居ると、自分の足の下にはだんだん大きな穴が出来て来る。そうしてずるずると、身も心もその中へ滅入り込んでしまう。

自分は、穴の中へ入る事は大きらいである。自分が穴の中で死んでしまう人間であつたらと思う事は実際に苦しい。そう思うと自分は自分の生れた事を呪う人間だ。自分は歩まねばならない。自分は歩む事によつてのみ自分の生存に意義を認め得る人間だ。

絶えず歩まねばならぬ、行き得る所迄、力のつづく限り。しかし、自分は歩んで何処へ行くのだろう。自分は今その事について考えたい。

自分の心は常に自然の深く大なる力に圧迫されて居る。自然是その形相の底に知れざる無量の力をかくして、ひしひしと自分の心に迫まって来る。蒼大な海の夕暮に自分は幾度か驚愕と不安と憧憬に耐え入るばかりに心を戦かしたろう。ひたひたとよせる小さな浪の一つ一つにも不窮に広き大空の底光にも、自分

SAMPLE
Shishi-Shinsui.com

には知れぬ、不变の力の宿るを見て、自分はどうしても彼を抱き、彼に抱かれねばならぬとあせつた。實に輝く小さな小石にも、又は路傍のかすかな雑草にも、一つとして自分の心に、謎ならぬものはないのである。

自分が自然におびやかされて居る間、自然是自分にとつては終に「他」である。遠き「他」である。かくて自分は歩まねばならない。自然より不安を与える間は歩まねばならない。

自分にとつては、一切の存在^(とう)事は實に自分の解釈^(かいしゃく)の存在である。しかも、自分の理解する処が只単に自然の表相の美の認識に止まつて、更に深くその奥底にひそめる不变の力に及ばないとするならば、自分の生存は實に情けないものである。

自分はすでに朧ろ気ながらそれを感じ得るのである、更に進まねばならぬ、深に肉迫せねばならぬ。

自然の表相の認識は要するに瞬間である。時はうつりつつある。有限に生くる吾等が、有限を見つつ生きたとてそこに何の力があろうか。そこに何の意義があろうか。自分は、自然に對して自分が感ずる不知の圧迫と不安と憧憬は、有限なるものが無限に対する不安と憧憬とであると思つて居るのである。

かくて自分は歩むのである。いかにかして遠き「他」である自然に肉迫し突入して、彼を自分の心に抱き、彼に自分の心を抱かれたいのである。自分は自然を「我」にしなければならない。自然の底に深くもひそめる不知の力に全心もてふれ得る時、自分は全く「生」き得るのである。かかる所に行く事のみ人類はその存在に意義があるのである。

さらば自分は如何にして、自然に肉薄せんとするのであろうか。自分にとつてその唯一の方法は絵を描く事である。神を信じ神を恋うる神の聖徒が、その罪の苦痛より逃れん只一つの方法が祈りなる如くに、自分が自然に対する祈りは製作である。神の信徒がその神を讃めその神を恋いその神を抱かんとする衷心

の発現が只一つの祈りなる如く、自分の製作は祈りである。神の信徒が一切を神の前に告白する如くに自分が自然に対する製作は自分の告白である。祈り祈りて一步一歩神に近づく如くに自分の製作は一步一歩、自然に肉薄せなければならぬ。祈り祈つて更に深く神を抱かん欲求の苦痛の弥益す如く、自分の製作は更に更に自分を苦しめる。

「絶えず祈るべし、凡ての事感謝すべし」とは使徒パウロの言である。絶えず祈り凡て感謝する人は実は神を抱きし神人である。自分は「絶えず製作する」所迄歩まねばならない。不斷の制作——そはも早筆を執つて画布に向う事ではない。自分はここに行かんために歩みつつあるのである。製作しつつあるのである。

絵画に於ける技巧とは要するに、自然を理解した自分の心の具象を表現する方法であると自分は思つて居る。故に自分が自然を理解し自然の後にひそむ不变の力に近づければ近づく丈、自分の絵画は自然に肉薄して行くのである。^(モ)而して自分が自然を理解し自然に肉薄せんには、先ず探らねばならないのである、即ち自然に対する自己の感動せる心を絵画に具象して更に深く更に強く一色は一色より一筆は一筆より、一枚は一枚より深く強く自然に自分を肉薄させて行かねばならぬのである。

かくして絵画は終には自然そのものの再現であらねばならないのである。真に自然を再現なし得る時吾等は真に生き得らるるのである。久遠に触る事を得るのである。一切の不安と苦痛より解脱してそこに芸術的に自己を救い得るのである。

自分はかかる誇るべき域に達する事の決して空虚なる空想のイリュージョンにあらざるを思いたい。かくて自分はかくの如くに生きたる人としてロダン、ゴーホ、セザンヌ、ゴーガン、マチス、の諸芸術家の事を思いたい。

実にこれ等後印象派の画家達は今迄誰れも行かなかつた所迄行きついたのである。今迄たれも攫まなかつたものをしつかりと攫み取つたのである。自分は今これ等の画家が如何にして起り如何なる処に進んだかを考えたい。

モネー、ピサロ、等の印象派の画家達が小主觀に捕われたる在來の画界の伝習を打ち破つて更に大きく美の範囲を広め、すべてに冷たき客觀を教えた巧は偉大であつたが。人類は只それのみに満足が出来たであらうか。

實に当時画界は印象派の画家達によつて幻滅されたのであつた。今迄描くべからざるものも描かれた、今迄大切であった技巧のイリュージョンは破られた。かくして自然はありのままに写されたのである。

小主觀を破つて客觀に行つた画界は只それのみで止まつたのであらうか。画界の幻滅は終に大主觀の域に行かん為の用意であつたのだ。かくて後印象派の画家、セザンヌ、ゴーガン、ヴァン・ゴーホ、マチス、は終に生れたのである。

實にこれ等後印象派の画家達によつて、古今一切の芸術はその存在の理由を明らかにする事を得るのである。もし彼等が久遠に生れなかつたなら、古往の画聖たちが心血をそいだその仕事は一切徒勞であつたのである。

かくして、彼等後印象派の人々の多くは死んだ。おののおののその個人を立派に生かして死んだ。^(モ)而してマチスは既にその業を成して居る。彼はなお深くなお強く自然に肉薄しつつあるのである。

しかし、自然は終にこれ等の人々によつて理解しつくされたのであらうか。

マチスは終に自分の前に蓋をした。自分はマチスの絵を見てよくそういう不安に捕われるけれども、そは只いかに後印象派の画家達が、深く自然を理解したかを語るに過ぎないのである、自然はまだまだ無量

の謎を自分に語る、自分は進まねばならぬのである。

自分は進む、力の限り進む、されど自分は、あまりに進まん事を急いで終につまずいた他の多くの人々の事を知つて居る。即ち、印象派が墮して自己を空にしたる自然の平面描写なる新印象派ネオインシケンショーピストに往いたる如く。キュピストキュビストの一群はついに後印象派につまずいた。彼等は要するに後印象派に於ける新後印象派ネオポストインシケンショーピストである、と思っている。

又更に苦笑に耐えなのはイタリヤに起つたという未来派の一群である。彼等は要するに、奇形なる写実家リヤリストであつて、終に吾等と語るべき人ではない。

自分は只自分に自然が語るままに進むのである、自分の道は只自分の歩むためにあるのである。

自分はかくて未だ未だ遠く歩まねばならない、自分の弱い脚はついに彼岸に達しないかも知れない。更に人類は未だそこ迄到達する程生長して居ないのかも知れない。自分は終に自分を完全に救い得ないかも知れない。しかし、自分は、一步は一步、自分の生長しつつある事を思いたい。

自分は歩まずには居られないのである。穴の中は暖であるかも知れない、しかし苦しくとも歩みたいのである。何の為に？ 只自分はこれだけの事を知つて居る。自分は人類として真に生きよう為に。（一九一
二・八・二七）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

ゴ オ ホ と、ゴー ガ ン（感 想）

この二人の異った画家は同じ時代に生れ、不思議にも、意味の深い対照を自分に示して呉れる。自分はこの二人について評論出来ない。これから自分の書こうとするものは自分の感想に過ぎない。この二人に就いて、自分が今迄感じて来た事を断片的に書き綴つて行くのである。



自分は生きて行く。

自分は倫理、道徳を造り持つて居る。そして自分は活動して居る。そして自分は飽く迄人間だ。性慾を持ち食慾を持った人間である。自分は詩人でもなければ、画工でもない。單に人間である。自分は人間である。

自分は人間でありながら人間である事を識らない多くの凡俗を知つて居る。自分は彼等よりも幾層倍人間である。彼等には誠の生活がない。虚偽と伝習との中にうごめいて居る。自分には生活がある、そして自分は現実に生きて居る。自分の生活は眞に人間的である時ののみ深まり高まって行く。

自分が人間である事に於てのみ自然には意義がある。自分は自然を見るから生きて行くのではない。自

分が生きて行くから自然を見るのである。かくてこそ自分は自然を見る事によりて生活を肥し深めて行けるのだ。

自分は自然と如何なる意味に於てでも合奏する時のみ人間的になり得る。そして自分が人間であれば人間である程、自分は自然と合奏して居る。かくて自分は生活を離れて自然を讃美したくない。自分は心だけを自然と合奏させたくない。この身体ごと自然と合奏したい。

自分の生活内容は無論まだ實に幼稚である。自分の活動は浅く微弱である。しかし自分は生きつつある。自分が生きつつあればどうしたって前へ進むのは必然である。自分は自分の現今的生活に飽き足つた事はない。常に飢え渴く様に或るものを探して居る。自分の理性は飽く迄自分の微弱と虚偽と幼稚を自分に示し強うる。そして自分の意志は生きよ、生きよと自分に囁き迫る。

自分はじつとして居られない。かくて自分には、自然を眺めたり歌つたりして居る余裕はない。自分は自然や人生に對して涙を流そうと望まない。血が流したい。幻滅のあきらめはなおいやだ。自分は生々した人間だ。自分は^{おこな}行わざには居られないのだ。自分はもつと真に生々しくもつと真に人間になりたいのだ。血が欲しいのだ。煮えた様な血が欲しいのだ。自分は自然に抱かれる事によるの外自分の血を肥やす術のない事を知つて居る。しかし自然は先ず、人間に血を流す事を命ずる。ここに自分の生活がある。そして倫理と行為と思想と感激が互に育てられて居る。自分は自分の生命と活動を擋いて何を尊めよう。美も真も、客観的対照であつて何の力と憧憬がある。人間は根本的にそんなものを求めては居ない。自然是人間から讃美され様とて人間を造りはしなかつたろう。自然是生きたい為に人間を生かしたのだ。人間は生きねばならないのだ。眞実に自然を生かす為に。そして、眞実に自然に生かされねばならない。この事は本能である。考察や思惟ではない。そしてその事を識るのも。

SAMPLE
Show - Shin - suicom

この本能を離れて、自然や人生を眺めたとて、どうしてそこにほんとに人類を幸にする生命があろう。生活は、進むにつれて、益々創造でなければならぬ。道徳は常に衷から破られ建てられて行かねばならない。行為は常に道徳の欲求を現わさねばならない。自然がかく命ずるのである。そして、自分がかく欲するのである。自分の生活が独創にならないで、どうして自分に人間を真に愛する事が出来ようか。自分の倫理は、それを自分にゆるさない。自分の生活はまだ全き創造と建設には遠い。しかし自分は常に創造と建設をなして居る。自分の道徳や思想やは常に碎かれくずされて行く。自分は生きつつある。そして生きて行く。行き得る処まで生きて行く。自分にはこれを擋いて、祝福も喜悦も感謝もない。

自分は自分の現在の貧弱を恥じては居られない。鞭うつだけで沢山である。何といつても自分は生きずには擋かれないのだから。——一三・二・廿四

ヴァン・ゴオホは生きて行つた。

そして立派に生きた。血と肉の生涯であつた。

ゴーガンは讃美して行つた。

そして立派に讃美した。涙にうるおうた生涯であつた。

○

ゴオホは至る処にぶつかって行つた。そして至る処で生きた。ゴオホはどんな境遇にも決して阻害されなかつた。そして、最もよく境遇によつて生かされた。無論境遇を最もよく生かす事によつて。

ゴーガンは讃美出来る様な境遇を択んだ。ゴーガンはぶつかって来るもののすべてにぶつかって行かな

かつた。讃美し謳える時だけがゴーガンの生活であった。彼はすべて彼をいらだたせるものから逃れた。そして彼は彼が心の限り彼の心からの歌を唱える処へ行つた。彼は自然を呪つては生きられなかつた。只讃美し味わいうたう事だけが彼に幸福を感じさせた。

そして彼は出来得るかぎり彼の生涯の如何なる時をも自然の讃美である事をねごうた。彼は終に大きな詩人である。

そして、ゴオホは終に人間である。

ゴオホは、苦しむ時、痛い時、にも全力をつくしてその中で生きた。彼は自然を呪う事によつても生長し得た。彼の讃美は只そこにある。彼は坑夫に道を伝えずには居られなかつた。飢えと病いとで死にかかる迄も彼はなそうとした。彼が神について思索する時は、直に神について活動して居る時であつた。

ゴーガンは苦しみ避けた。苦しみ悶える事は彼の心を乱すばかりで何の幸福をも語らなかつた。彼は自然を呪うては生きて行かれなかつた。彼はこの美しい自然を呪うならばそれは一番悪い罪悪だと思うたであらう。

彼は死ぬ迄、眺めた、そして涙を流した。

彼が神を思惟する時は、神は美しき詩である。かくて彼はブリミティーヴな土人の神像と宗教の前に涙した。

ゴオホは宗教の中に突き入つて血を流した。
ゴーガンは宗教を眺めて涙を流した。



SAMPLE
Shoshi-Sinsui.com

ゴーガンはタヒチに行かなければならなかつた。

しかし、ゴオホは、タヒチへ行つても生活する事が出来たにちがいない。一三・二・廿五



ゴオホは現実に生きた。彼は常に現在の中で一溢いはになつて居た。この迸出と爆発が彼の生長であつた。しかしゴーガンは現実を生かし現実に生き様としなかつた。

彼は常に詩と讃美を目的として居た。彼は彼の詩と讃美の中で滋溢する事のみ出来た。そして彼の詩と讃美は調べを高めて行つた。しかし彼の生活は外面的の変化の外常に変らなかつた。

ゴオホの絵は一枚一枚に破壊と創造である。どの絵の様式も内からくずれて居る。彼は常に現在の中で溢れる程一杯いはいになつて居た。彼は斯く描こうと努力しないでよかつた。一杯になつて居るもののが内から内からと湧きくずれて行く事でよかつたのだ。

ゴオホ位新たなる様式を創造した人はないかも知れない。しかし、彼の様式はどれもこれも内からほんとに破れ、くずれて居る事を知らねばならない。

しかしゴーガンは様式が出来てから絵が出来た。彼の画の様式は外から築かれてある。内からくずれて居ない。ゴーガンは自然から味わうた感動を智的にシムボライズする余裕を持つて居た。そしてその才能をあまる程持つて居た。彼は製作する毎に一つの標的があつた。それは彼の詩である。彼の心が讃えようとする自然である。彼はそれを思いつづけて製作した。彼の様式はこの標的の完全な具像である。そして彼は一枚一枚にその様式を完成し積み重ねて行つて居る。彼は眺めには描けなかつた。しかし、見つつ描けなかつた。(ゴーガンも美しい写生画を持って居る。しかしその習作の様式は終にゴーガンである。標的とそれを具像しようとする計画である)

ゴオホは描く事が見る事であった。ゴーガンは描く事が見た事であった。

ゴオホは製作する時に標的がなかつた。彼は自然から受ける感動の全体を跳らした。彼は自然の部分を皆生かした。彼はぶつかつて来る自然のすべてにぶつかつた。彼は扱う事を知らなかつた。彼が部分を生かす事は全体の力を生かす事になつたのだ。

しかしゴーガンは出来る丈部分を殺した。否むしろ扱つた。彼は詩でないすべての自然を捨てる事を恐れなかつた。彼は讃美し得るものだけで描いた。ぶつかつて来る自然全体にぶつかるにしては、ゴーガンは詩人であつた。ゴーガンは常に全体の為に部分を扱つた。そしてその全体とは即ち彼の讃美した自然であつた。詩であつた。そして標的であつた。

しかしゴオホにあつては全体は後の事であつた。部分が生きれば生きる程全体がはつきり生きて來るのだ。

強いてゴオホに標的があつたとすれば、生かす事と生きる事だけであつた。

ゴオホの絵も、ゴーガンの絵も共にリズミカルである。しかし二人のリズムが人にせまる様はまるでちがう。

ゴオホのリズムは、部分と部分とが生き合い旋律し合いうずまきうずまいて全体に及んで居る。ゴーガンのリズムは全体のリズムを表す為に部分が節奏にかなう様に折衷され塩梅されてある。

ゴオホは生命のリズムを揺んで行つた。
そしてゴーガンは詩のリズムを謳うて行つた。

ゴーガンの心は高潔な心であつた。張り切つた肉感的な女の腹這いになつた姿も美しい詩であつた。



SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

山に木を切りに行つてその木でうき彫りの靴を作つて身につける事で彼の生活は芸術化された。彼はタヒチのミステイックな神話や伝説の前に憧憬の涙をしみじみと流した。彼は自ら洋服を脱いで裸になり、裸足で山を涉つて、タヒチの怪神に遇おうとした。

ゴーガンの生涯は人に涙をさそう魅力を持つて居る。



ゴオホの心は人間の深さを持つて居た。

彼は聖人の顔が描きたいとねがつた事があつたそつだ。そして彼は常に人間と面接して生きて行つた。彼の生涯は人に涙をさそう前に、人に生々した血潮をそそぎかけて居る。

彼の狂氣と、彼の最後——自殺とは、この事をよくシンボライズして居る。

ゴーガンは望みに向つて歩いた。

そして彼の一歩は一歩より望みに近くなつて行つた。
ゴオホは望みに面接して歩いた。

そして彼が歩くとともに彼の望みそのものも歩いた。そして育つて行つた。

二人の望みが異つて居るからである。



ゴオホとゴーガンはある宿屋で争うた。

そしてゴオホはゴーガンを殺そつとした。そして彼は耳を切り終にはその事が発狂をうながした。そしてゴーガンはそこを去つた。

二人は争わねばならなかつたのだ。

しかし、ゴオホは、死ぬ迄、ゴーガンを師と呼び、尊敬した。彼はゴーガンに自分の持つて居ないある才能を認めずには居られなかつたのだ。

しかし、ゴーガンは終に眞のゴオホを認める事が出来なかつた。この事は詮ない事である。そして必然である。

ゴーガンはゴオホに詩を求め迫つた。しかしゴオホ本にはそれがなかつた。少なくもゴーガンに満足を与えるものを持つて居なかつた。そしてゴオホは生命^{ジイシ}を示した、しかしゴーガンにはそれを受ける事が始めから出来ないのであつた。ゴーガンはそれを了解するには詩人であつた。この事が二人を争わしたと云う気がする。

しかし、ゴオホは始めから、ゴーガンに生命を要求しようとはしなかつた。彼は、自分の持たぬものを持つて居る先人としてゴーガンを見た。ゴオホは、ゴーガンの謳う詩にもぶつかる丈の力を持つて居た。彼はベルナールやゴーガンの絵を模写した。そしてそれに血をそそぎ生かした。丁度、彼が自然を描く時と同じようにな。

人間は終に詩人を容す。^{ゆる}

しかし、詩人は終に人間を解さないであろう。



自分は詩人として画家としてゴーガンを偉大な高い人だと思う。彼が生活を深める事を避けた事を見ないならば、自分は彼の大きな勇気を讃美するであろう。彼の独創と豊富とを讃えるであろう。そして自分は現今に於て彼程の才能ある人を見ない事を悲しむ。

しかし、自分の生き行く事に、彼は無関心で居る。

自分が生きて行こうとする時、ゴーガンは自分に袂別しようとする。

生活のみ尊い。そして人間である事のみ、自分にとつて有意義である。

自分はゴオホの生活の前に戦く。彼は人間がどの位強く生きられるかを自分にしめして呉れる。

生きねばならぬ。全力を挙げて。



自分のこの感想は独断である。一人について間違った判断をしてるかも知れない。しかしそんな事はどうでもいい。自分は二人についての独断のみに自分にとつての価値と権威を認める。そして独断は育つて行く。自分の生長とともに一切の独断は育つて行く。そして今のこの独断は自分にとつては少しのうたがいを入れる事が出来ない。恐らく、自分がいくら生長しても変わらない判断であるという気がする。

独断は常に自分にこう思わせる。だから独断なのである。そして権威と価値がある。だから間違つて居ても差しつかえないのである。一三・二・廿六

SAMPLE
Shoshi-Sensei.com

ヴァン・ゴオホの絵

真に自己の生活に力と権威と愛とを感じつつその生活を深めて行けない人間に、ヴァン・ゴオホは到底了解し得ない。生きようとする内なる慾望の抑え切れなさを味わいつづけない人間や、その慾望を軽侮する人間や、生命を底から渴き飢る食慾やに無縁な人間に、ゴオホが了解されるのは当然である。

ゴオホは生々した人間であった。ほんとの生きた人であつた。彼の血は血に飢えて居た。彼は生きようとする慾望にうずいて居た。彼位生々しい人間の慾望に駆られて絵を描いた人は少ない。彼は痛ましい程にその画布に自が血を覗かねつた。彼位露骨にその慾望を輝かした人は少ない。彼の絵は実に無遠慮だ。彼の絵を見て居ると實に耐まらなかねそうだ。實際何物も顧慮する事が出来ない程、その慾望があばれ廻まわつて居る。息が迫つて来る様に彼の画のリズムは湧きあふれて跳つて居る。彼の画には生き物のきたなさが露骨に出て居る。彼の画には化粧がない。汗あせがだらだら流れて居る。

貪婪な慾望を識らぬ者に生きる力はない。慾望なく生活なき者にとって、ゴオホは到底下品な浅薄なものであろう。山本鼎という人は、ゴオホをそう評した上に猾智だといつた。浅薄で下品で猾智で仕方のないのはゴオホではなくて、山本鼎と云う人にちがいないとすぐ思った。ゴオホの絵がそう見える以上、そ

SAMPLE
ShowShinsui.com

の人は浅薄で下品で猾智にちがいないと自分は断言して差しつかえないと思う。

人間の眞の生活を軽侮する奴は、生活のない事を自証するからである。そして、ゴオホの絵位露骨に生活を思われる作品は稀であるからである。

我々の貪婪なる慾望は我々の生活をどんな処にでも深入させる。我々は飽く迄生々しく生活を営む。自分は慾望を生かす事によつて生甲斐を感じ満足を感じる。自分はここに於てのみ眞の幸福と喜悦を味わい得る。

生き行くものにとって、その生活には絶対に、概念的な理想はない。そんなもので自分の生活を縛つておくと生命が枯れてしまふのである。欲し望む事を只正直に、無遠慮に露骨に生かす事のみ、理想と云えば理想である。あまりに分かり切つた理想である。憧がる事のいらぬ理想である。ぐんぐん生きてさえ行けば理想的な生活が出来る理想である。飽く迄貪婪に飽く迄貪欲に自分は進んで行く。

生き行く力なき弱者は、かかる生々しい生活を正面からまともに見る事は不可能だ。彼等にはそれはあまりに痛まし過ぎる。彼等には強者の流す血は酷すぎる。彼等は自分達の様に血を流す事で血を肥し得ないのだ。彼等の血は流すにしては枯れて居る。かかる彼等に、自分達の生活が諒解出来ないのは当然過ぎる位のものだ。

かかる彼等がゴオホを下品だというのは実に必然的だ。かかる彼等がゴオホを狡滑だというのは見え透いた邪推だ。彼等はゴオホを狡猾と見ねばならぬ程弱いのだ。自分自身の生活にごまかしと妥協とを狡猾にやりくりして居る彼等は。

弱者には眞の自由を解する力がないのだ。眞の自由を解し得たら弱者にはなつて居られないのだ。弱者は常にその生活を小さな理想や標的を以て縛ろうとする。さもなければ安価な妥協に安んじて居ようとする

る。彼等は慾望を感じずる前に慾望を殺す事に狎れすぎて居る。かくて彼等は自分自身を育てようとしている。そして、生長して行く強者を笑おうとする。生長して行く強者の生活を邪推しようとする。下品だといふ、浅薄だという、猾智だという。虚偽だという。自分達の生活は或る意味で汚なく下品かも知れない。しかし、それは、うごめく生物の生々した感じだ。自分達は少しもそれをきたないと思わない。自分達は自分達がぐいぐい露骨に無遠慮に、裸体になって行く事を誇る。そして、自分達が飽く迄、強い本能と慾望を持った生き物である事を祝福して居る。自分達は何よりも先ず人間でありたいのだ。

生活なき弱者にはこの無遠慮さがない。血がない。自由がない。生々しさがない。（劣悪さは漲つて居るが）かくて彼等は眞の生活を軽侮する。そして、眞に生活の滲み出した作品を嘲罵する。彼等はダラダラ汗を流した人間を汚ながる。そして化粧して居たがる。ゴオホは終に彼等とは無縁である。ゴオホを底から根本的に解し同感し得るのは自分達丈である。生活ある人間のみである。

生活の滲み出て居ない作品は耐らない。真にそのリズムにその人の生命の活躍が息づいて居ない作品を自分は侮蔑する、ルノアールがどんなに美しくとも、ゴーガンがどんなに詩的でも、自分は唾をかけて捨てる。それ等が美しければ美しい程、詩的ならば詩的な程嫌だ。そんなものは無くともいいのだ。自分は、自分が根本的に共鳴し得ない作品は無くとも人類は困らないと思って居る。そして自分は第一義的な芸術とのみ跳れると思つて居るのだ。彼等には到底、第一流の芸術は分りはしない。二流三流の芸術きりと跳る事の出来る力しか彼等には賦与されてないのだ。彼等は第一流の行き方を考える事も出来ないのだ。第一流の行き方からライフを取り去つたら零だ。生活に盲目な彼等が第一流の行き方を了解しないのは必然だ。弱者の生存には創造もなく生長もない。

生活は要するに自己の生存の創造だ。そしてこれは自然と離れては營み得ない。自然の意志を内に感じ

自覚する事のみ自分達に幸福と感謝である。自分はここに生き甲斐を感じ愛を感じる。自分の生れ来た事に権威と愛を感じる。真に自分の孤独を擱んで行かれる。

自分の生き様とする意志の中にはどうしても自然の意志と力がある。かくて自分の生活は自然と離れては枯れてしまう。どこ迄も自然を生かし自然に生かされねばならない。そして自然に生き自然を生かすにはどうしても自分の意志を徹するより外ない。自分の慾望を生かすより外ない。真に根本から自分の慾望や意志を感じると必然に自然の意志は感じられるのだ。ここに根を持った生活のみ真に生長し得る。そして真に創造されて行く。自分は自分を愛する事によつてのみ段々深く自分の孤独を感じて居るのである。そしてここに於てのみ自分は自然の恩寵を感じ、力を感じる。ここに於てのみ自分は自然と相愛になり得る。ここに徹する事のみ自分の愛は育つ。ここに於てのみ自分は他の一切の実在や生存との最善（自分の現状に於ける）の交渉を嘗み得る。ここに於てのみ自分は自分を最も露骨に無遠慮に一切の他にぶつけ得る。これは自然の意志である。ここに自分は自分の生活を創造して居る。自分は自分にぶつかる凡てを食つて行く、そして更に自分をぶつけ、叩き附けて造り行く。自分はそうする事によつて自然を感じ得る。何故なら、そうする事が一番自分の慾望や意志に忠実なのだから、そうして、そうする毎にそこに力を感じ必然を感じて居るのだから。そして自分は今の処最も純にこの経験をなし得るものとして製作を擱げる。

自然と跳らずに居られない自分の生活は、必然に製作をせずには居れなくなる。ここに感ずる創作のアクトラクションのみ自分は尊いと思う。その他は遊戯に過ぎない。ここから製作して居る人を、自分は一流の人という。その他を二流三流という。

今の自分にとって、製作程、孤独になつて外界の一切の実在と触れ合えるものはない。創作は自分の実

在を一番はつきりさせるものだ。かくて創作慾は自分の意志の最も純一な露われである。ここに於て、その製作の様式には眞のリズムが生れて来る。それは生活のリズムである。その人の生命の躍動の音律である。食つて行く様に自分は画を描く。自分は只事実を描く。そして、自分は只クリエートして行く。生活の渉んだ絵というのは生活状態を描いた絵でもなければ、その人の生活がその絵に語られて居るというのではない。どんな部分にもその人の生命のリズムが息づいて居る事である。その人の生活がほんとに一切の実在にぶつかって、そこに事実が生きて創造されて居ねばならないのだ。生きつつ、生きつつ描いてなければならぬのだ。ぐいぐい物に食い入つてなければいけないのだ。自分はかかる製作の外、絶対にその生活を深め得ないと思つて居る。かかる製作の外、真に自然と自己とを跳らす術はないと思つて居る。自分はかかる創作をなす人を第一流というのである。

ゴオホはかくの如くに生き、そしてかくの如くに只描いた。彼位製作慾に燃えた人は少ない。彼は只製作する事によつて苦しい迄のその慾望を慰めた。彼は製作する毎に製作慾を深めた。彼は狂う様にその慾望にあえぎ、その慾望を満たした。そして満たせば満たす程彼は慾望に燃えた。彼の絵を一生を通じて順次に見る時、この事は明白である。彼は只製作する事によつて自己の愛と、自然の愛とが渾然として相抱くのを覚えた。彼は自然を見ずには生活が出来なかつた。彼にとつて見る事は自覺である。彼は凡ての事実を生かした。彼には単なる事実はない。すべてが眞実であった。彼は万有を燃やし輝かした。彼は自然とそれそれになつて居なければ生きられなかつた。彼が絵を描かずに居られなかつたのは、自然を離れて生活が営めなかつたからである。そして彼は絵を描く事によつて凡ての事実を自己の力と愛を以て生かし眞実となし得たからである。彼は只全力で実在にぶつかつた。そして、血を流した。彼は貪婪に彼のぶつかる凡てを喰つた。彼の衷に輝いた。彼は創造者である。そして貪婪者である。

彼の手法はこれ等の事を明らかに証して居る。彼の筆触の動き方には極めて自然なものがある。意識して智的にそうしようとして到底出来ない流動の仕方である。顧慮された跡は少しもない。非常に自然に朴訥に真正直に叩きつけられてある。その手法はゴオホにとって最も簡易な手法である。彼は対照の差別によつて殊更にその手法を工夫し変え様となかった。彼の手法にはそういう意識的な処が少しもない。どんな物のどんな部分をも同じ意味の手法で描いた。どんな部分にでも彼は全力でぶつかり全力で生かしたのだ。筆触や手法や様式について顧慮するという事は内が緊張して居ない事を意味する。彼は彼の手法や様式を少しも顧慮せずにひとりでに生んでしまったのだ。彼にとって彼の手法は発見でも練習の結果でもなかったのだ。彼の自覚が湧き溢れて来る^{ニギハ}と彼の手は必然にああ動いたのだ。何故なら彼の手法には全然意識的な処がなく、極めて必然的に跳躍し得て居るからである。彼の手法は極めて簡易な手法である。しかし、その跳躍は彼の痛ましいばかりの慾望の顕現である。生活とその慾望を味わい知らぬ人々がゴオホを浅薄で猾智だというのは当然である。彼の手法が意識的に考えられるのも無理はない。そしてそれが狡猾な逃げ道に考えられるも無理はない。しかしこれ位滑稽な馬鹿氣た事はない。

ゴオホのこの手法は只彼の如く真に自然を内に自覚し生かし得ない人には解し得ないのである。内に眞実を生かし得る時はじめて、彼の手法は生れたのである。實際彼は只自覚するままに描いた。彼は眞の意味に於ける徹底した写実家である。彼は只自己にとつて事実であり誠であるものより外描かなかつた。

彼の絵に单なる写実が軽視されてあるのは事実である。この故を以て絵の手法が様式的で誇張があるものと云う人がかなりある。自分は或る人々にそう見えるのは必然だと思う。しかしゴオホは意識的に実写を輕侮しなかつた。彼は殊更に自然の外形や表相を単化したり象徴したりしたのではない。彼は実在の眞

體などという概念を作つて、それを表現しようなどとしたのではない。彼の作品は決して単化や象徴ではない。彼の絵程或る意味で真に緻密なものはない。彼は描き得る力で、その力を全力で食う様に造つたのだ。彼の画面はどんな一部分にも彼の力が平等にそがれてある。彼は打つかるものを意識する必要がなかつた。それよりも彼は隙なく自然を自己の意識の中に生かした。彼の意識は苦しい程充溢し切つて居た。彼は外面的写実を顧慮する必要がなかつた。それ程自己の衷に真実を見て居たのである。彼は只自己の衷の真実を如実に写したに過ぎない。彼位正直にその真実を書き得る力を持つた人はかつてなかつた。

ゴオホはどういう風に絵を描こうと考えずに描いた。彼は只彼の全力で、実在の部分と全体にぶつかつて、そこに彼の生を創造したのだ。彼は感情や情緒を描きはしなかつた。只現実を生かした。彼は彼の感情や概念に束縛されはしなかつた。彼は直接に現実の生命を押し出した。

製作に当つて、如何に描くかという作画のエフェクトの上に標的を持つという事は既に意識的で、不純である。こういう風に描くという事は生活と交渉がない。何故なら、それは対照に感ずるアットラクションを全部生かすという事にならずアットラクションに自分の感情や概念を以て制限を加える事だ。即ちエフェクトというものは作画の以前に頭に浮んだならそれは概念になつてしまつて現実から超離してしまうからである。この概念（多くの場合には感情や情趣によつて作られる）によつて現実を束縛し折衷し塩梅するならばどうして現実そのものにぶつかつて、それを生かし、そのものに生きる事が出来よう。エフェクトは作画の終結後始めて現実となつて存在する事実であつて、作画以前にそれを予想しなければ実在にふれ得ないならそれは明らかに、現実の自己の力の欠陥を意味するのである。

ゴオホは力に充ちすぎて苦しんだ。そして彼は只それをぶつけた。彼にはどんなものでも描けた。彼に

とつて現実でさえあれば何でも彼はその上に彼の生をクリエートし得た。彼は概念的に美を考えなかつた。彼の力と生命そのものが美であつた。彼は彼の内の真善美を輝かした。ゴオホの描いた樹木や人の顔は単に樹木でも人の顔でもない。即ち彼の愛と力である。彼位何でも生かし得た人はかつて無い。彼は実際に何でも廻避する事なしにぐいぐい実在の中に喰い込んで行つた。彼の画面は如何なる部分からも力を反撥して居る。画面全体から彼の強い創造力が押しよせて来る。も早彼の画は、物体の眞の心を描いたとか、物の精神を象わしたとかいう様なものではない。(ゴーガンをぬかした後印象派をそう思う人は馬鹿だ)画ではないかも知れない。少なくとも凡人の考へてる絵ではない。生活そのものだ。一つの筆触、一つの布局だけでもそこに創造を見る事が出来るのだから。それ等が統合されて初めて力になるのではなくて、それ等の力が互にせめ合い押し合う処に初めて画面が出来るのだ。彼は実に現実の画家だ。画家は只それが使命だ。絵画は実在を痛感し、それによつて生き得らるる人のみなし得る芸術だ。この行き方の芸術のみ第一流だ。この行き方のみ生命と交渉があるのだ。

昔から一流の偉大な芸術家はその時代時代に必ず居た。そして、その時代を生かして居る。その時代はその人が居るからその時代としての意義があつたのだ。そして次の時代を創造して來たのだ。自然の意志である。そして自然は今の時代にゴオホを生んだ。ゴオホは古来の全ての偉大な芸術家の仕事を深くした。徹底さした。純にした。そして赤裸になれる丈赤裸にした。彼程直説法に生と力と慾望と愛とを示した人はかつてなかつた。自分はこの事を精しくいいたいと思つて居る。かなり深い問題の気がするから。

自分達は彼に待たれて居る人間の氣がする。自分達でなければ彼れを越える事は出来ない。自分達に出来なかつたら今世はまだその人が生れる時でなかつたのだと思える。それ程自分は自分の生活を感じ

て居る。

自分にとつてゴオホの生きて居て呉れた事は他所事でない気がする。自分は自分の孤独と彼の孤独との愛を感じる。孤独を味わい得ない凡人と彼は全く無縁である。彼はいつも孤独である。彼位その作品に彼自身の孤独を滲ませた人は少ない。自分は眞の孤独のない芸術を軽侮する。オランダライ獨創はこの孤独から生まれる。孤独を味わう事の深い人間程自然を感じるのだ。自然が自分を生んだという事の本統の自覚こそ孤独だ。そして、この自覚は思惟や感情ではない。その生活に於てそれを痛感するのだ。生活なきものに孤独も独創もない。眞の愛はここにのみある。愛は到底、自愛を根本とする。これなき愛は情感に過ぎない。力ではない。ゴオホ程根本に生きた人は稀である。彼の生涯は悲壯だ。人間的だ。そして生々して居る。

彼を笑うものこそ哀れである。自分はこの文を、多くの日本の洋画家に送りたく思つて居る。

SAMPLE
Shoshi-Shinji.com

自分の行く道 その他雑感



自分は自分の行き道を本統に明らかに知つて來た。そして、その行き道に在る自分の現状と位置を本統に明らかに知つて來た。そして、自分は、自分の性格や素質と自分の本能や慾望との調和を感じて居る。自分は自分のこの道を行くより外、この調和の得られないのを感じて居る。そして、自分はこの行き道以外に真に自分を生かす行き道のないのを信じる事が深くなつて居る。そして、自分がこの調和を必然に得る道を、自己の内の力によつて作った事に、祝福を感じて居る。そして、それは同じく、自分の慾望や、本能や、性格や素質が生み出したのだと思つて居る。

自分は自分の行き道と自分の現状を知る事によつて、或る淋しさと或る法悦や希望を感じて居る。自分が自分の真の孤独にどんどん深入りして行くからである。そして自分は人間がほんとに、この孤独になるの外、一切の他、外物との本統の接触や交渉をする事の出来ないのを信じる。自分は自分の道を知つて、自分の現状を知つてほんとに、自分でないすべての道や個性を知つた。

そして、自分と同じ様な行き方をする他の個性と自分との差別もはつきりと知つて來た。かくて、自

分は、自分にのみゆるされた自然を見る眼の開かれて行くのを痛切に感じて居る。自分の道を押し進めば進むに従つて製作すればする毎に自分は、それを痛切に感じ味わうのである。恐らく自分は一生この事を味わい続けるであろう。恐らく一生自分はこの中で感謝したり、淋しがつたりするだろう。そうして、一生、苦しんだり、喜んだりするだろう。

自分は時として、自分の孤独に淋しさを感じる事がある。他の個性と自分の性格との差別を底から意識する事によって自分は或る淋しさをほんとに味わう事がある、この道を切り進むより外能のない自分は、或る時この自分の道の明らかな差別の意識に淋しさを感じるのである。しかし、自分はこの自分の孤独を感じる事の外に、自分の生存を感じる事の出来ないものである。そうして、自分の生存と意志に権威と祝福とを感じるのである。人間は孤独を擱んでからでなければ真の生活を創め得ない事を自分は真に感ずるものである。

或る云い方をすれば孤独とは、人類としての自分と自然との意志の調和を本当に感じる事である。自然が人類として自分を生んだという真正の自覚が孤独である。少なくとも人間は孤独になるの外本統に自然を見る事は出来ない。本統に人類に交渉する事は出来ない。

自分は自分の孤独に祝福と感謝と感じて居る。そして、自分が孤独によつて、味わう淋しさにも自分は力を感じ祝福を感じて居る。

自分にとっては、淋しさも、苦しさも、力も、歓喜もともに自分のこの孤独の道を切り進む事によつて味わい得る経験である。自分は淋しい時にも、元気な時にも、自分の力をほんとに出して居るのである。ともに自分の執拗な貪婪な慾望の顯現である。

自分は、自分のこの孤独の道の果しなく遠いのを感じて居る。そうしてそれと同時に現在の自分に権威

を感じて居る。自分は自分の現状や今の製作を未完成だとは決して思わない。自分は常に自分の全力をつくして居る。どうにもならない処までやつて居る、あくどい迄に自分は追求して居る。だから、自分は、自分の現状を、自分として、完成しつつ常に更に大きな完成に向つて進んで居ると思って居る。しかし、自然から見たら、終に自分の一生は未完成であろう。古来の一切の人類が未完成であつた如くに、ミケルアンジェロ、レムブラント、ゴオホ、が未完成であつた如くに。

自分は製作する毎に、どうしても描けなくなる処まで描いて居る。そうして、そこ迄行くと、自分は何度も何度も同じ部分を上から上から描いてみる。しかし、どうしても描けないものがきっとあるのに出会う。そうして、これを追求する事で自分の芸術は進んで居るのを感じる。自分はこうして、自分の意識を段々深めて行って居る。しかし、意識が育てば育つ丈、自然も育つて行く、かくて自分は自分の製作は、自分の現在の力のほんとの完成であるという。それと同時に、自然に対して、いつ迄も真に未完成であるという。自分はこの道を進む事によって、自然の深さの量り知れなさを痛切に感じて居る。自分の一生が本統に自然とぎしげしに押しくらするものである事を感じて居る。そうして、自分はこの事で、自分の道の極まりなく深く真のものである事を信じさせて居る。自分は一生満足と飽く事を知らずに行ける事を深く祝福して居る。自分の前にいつも自然が育つて居て呉れる事を自分の力と自然に感謝して居る。

かくて自分は、製作毎に更に深く、自分の孤独を擡んで行く、そして、自分の道をほんとに知りつつある。そうして自分は段々この自分の道を信じる事が深くなつて居る。少なくとも、自分の行く道を本道だと益々深く思い込んで行くのである。人類と本統の交渉のある行き方と信じて居るのである。自分の力を信ずる限り、自分は自分の行き道を信じるのである。

時として自分はこの自分の行き道の客観的価値を考える事がある。そうしてどれ丈の大きさを持って、

人類に交渉するかという事に或る不安を感じる事がある。しかし、この事は自分の力に対する自信の減少した時に限りて自分の心に興る不安である。そうして、自分が、ガイガイ自分の行く道を切開いて進んで居る時には、それを思う暇がない程、自分の凡てと自分の行く道とがピッタリ融合して居るのを感じるのである。そうして内に火よりも強く執拗な慾望を感じるのである。そうして自分はこの慾望に人類として真に尊い権威を感じて居るのである。

自分は自分の道の客観的価値を知らない、そうして知ろうとも欲しない。道は力を造らない。力のみ道を創造する。道として自分は人類に交渉しない。道によって自分の力を人類と交渉させるのだ。かくて自分の力を信じて居る自分は、自分の道が只本道である事のみ信じて居る。そうして自分の力の将来と信ずる限り自分の道に光輝を感じて居るのだ。

自分は只自分の慾望と力を信じ、それに権威を感じて居る。そうして自分は自分のあらゆる本能や性質を尊重して居る。かかる自分は終に自分の行く道を信用し切つて居られるのである。自分は自己の道の権威を真に強く内から感じて居るのである。一九一三・十・八



　　眞の自己の道は、最も自由な道でなければならない。少しも遠慮する処なくあらゆる隅々まで自己を押し切り得る道でなければならない。そうして、その道を行く事が或る意味で真に易い道でなければならない。少なくとも一番手近かな道でなければならない。

　　しかし、それと同時に、その道を行く事に眞に苦しみ得ない様な道は眞に自己ある道とは云い得ない。そうして、その道を行く事によつて眞に底から自我の権威と生存の祝福と感謝を味わえない様な道も。一

○

自己の道は自分全体を出して行く道でなければならない。その道を行く事によって、自分の凡ての本能や素質がほんとの調和を得て行かなくてはいけない。そうしてそれ等が凡て全く少しの妥協なしに生かされて居なくてはいけない。

自己の道は少なくも自己の中のあらゆる凡てを肯定出来る道でなければならない。そして、その道を行く事によって、自己の中の凡てがその本然の質に於て生き合つて来るものでなければならぬ。益々生き合つて茂り合つて真に交渉し合つて来るものでなければならぬ。

自己の道は真に自己を生長さす道でなければならぬ。

これなき道は真に孤独なる自己の道であるとは云えない。一九二二・十・八

○

自己の道は、自己丈の道である。類似した道があるけれども自己の行く道は真に自己の外誰れの道でもないのである。

自分は自分の道を道として他に類似した又は同種のものを見得るのである。しかし、この道に於て、自分が終に仕出来かす仕事は量る事は出来ないのである。自分は自分の道を最大なる道にするかも知れないのである。

芸術は只力であるという事を自分はこの頃真に感するのである。そうして、自分は自分の力をひたすらに慾望して居るのである。そうして、自分は自分の慾望に力を感じて居る。一九一三・十・八

○

自分は自分の行く道の客観的な性質について説明しなかった。そうして、今自分はそれをする気になれ

ない。それは、只自分の画を見れば解ると思うから。そうして画は言よりもその事について深く語ると思
うから。一九一三・十・八

SAMPLE

Shoshi-Shinsui.com

自然——文展の洋画を見て——

或る必要から二、三日前文展を見た。そしていやな気がした。自分達の空氣とまるで空氣がちがうので見苦しくてならなかつた。

自分に孤独の道のあるのをしみじみ思つた。そして自分に誇りを感じた。しかし一方自分は淋しいやな気もした。劣等な彼等がいつ迄も栄えようとするのを見て。

こうして自分は自分の小さな家に帰つて自分の画を見た。そしてほほ笑んだ。そして自然を思つた。

彼等の力は或る程度まで強いかも知れない。彼等は相結ぶ事によつて今の世に勢力を蔓らすかも知れない。そうして彼等の劣悪さはその勢力の出来る一番根本の原因であろう。恐らくは自分は一生彼等を見なければなるまい。そうして恐らく一生自分は彼等を見る事の為に不快な思いや苦しい思いをするかも知れない。しかしその度きっと自分は自分の絵を見て、ほほ笑むだらう。彼等が百人の力を以てしても千万人の力を以てしても到底入る事の出来ない自分の芸術を見てほほ笑むだらう。

自分が心から恐るのは只「自然」である。そうして自分が心から愛するのも只「自然」である。自然を離れて自分には慾望はない。生長はない。光はない。自然を離れて自分には愛はない。人類の慾望も自

分は只自然を見る事の外感ずる事は出来ない。自分が人類と交渉し得る程度は自分が自然を見得る程度だと思つて居る。人類と交渉なき生存に耐えられないことを感じ得る自分は自然を見ずには居られない。そして自分が人類と交渉なしの生活に耐えない或る淋しさや苦痛や不安を自分に植え附け育てた自然を愛し又恐れずには居られない。心の底からそうしずには居られない。そうして断えず緊張し切つて自分に生長を迫る自然の前に深い感謝と畏敬を感じずには居られない。

自分の一生は自然をほんとの意味で知る事に終始すると思つて居る。自分の生長とは或る意味で自分が自然に対する本統の智恵の生長に外ならないと思つて居る。自分は自然の意志を内に感ずる事の外人類の意志を知る事は出来ない。自分が自然を知る事の外自分は本統に人類としての自分を知り得ないものだと思つて居る。そして自分と人間やその他凡てとの眞実ある交渉をなし得ないと思つて居る。自分は自然と離れた愛を思い得ない。^(エ)而して自分は愛なき人の生涯程やくざなものはないと思つて居る。自然や人類の意志に対する無智程卑しむべき愚はないと思つて居る。そうして今の世の多くの人が凡てそれなのを思つて居る。

自分は自然とは何ぞやと聞かれても、その客観的な説明を今の自分に出来ないのを知つて居る。自分に自然とは何かと聞く人があつたら自分は只眼を開けというより外ないのを知つて来た。自分は概念を以て到底自然を語り得ないものの気が益々はつきりして居る。或はいつか自分はそれを言い得る事があるかもれない。又永久にないかも知れない。そして今の自分にはないと思う方が強い。それ程自分は今の自分が自然を客観的に説明出来ないのを恥と思つて居ないのだ。

自分は自分を知る如くに自然を知つて居る。そして自分位今の世に自然を知つて居る人の少ないのを感じる。自分には自然が感じられる。自分の内を掘れば掘る程自然は内に湧きあふれて来る。自分には凡て

が自然の様に思える。自然とは何だろう。只それは自分のライフと自分の製作が語るだろう。もとより自然の前には微だろうが。しかし心あるものにはきっと自分のライフと製作は自然を語るだろう。自分は自分のライフや製作が人間と交渉すればそれは自然を語る事でだと思って居る。自分の製作が進むのはここの方が進む事に外ならない。自分は自分の意志と自然の意志との調和を感じる事によって自分のライフや製作が本統に生長し進歩する事を底から信用して居る。そうしてその事によりて又自分の製作が本統に進めば進む程人類に根ざし人類に交渉し、又今の世の人々にも真の交渉をする事を信じて居る。例え今の世に真価を知られなくとも知られなければ知られないという結果はその真の交渉の表われだと思う。

自分は自分の内に自然を感じる事に於てのみ自分の凡てを祝福し得る。自分の内の汚いものや或る弱いものも、自然の与えたものと思う事によつてそれを否定しないのだ。そうして自分の内の汚いものや弱いものを自然と思える程自分に慾望と力を与えたのも自然だと思つて居るから。そして又それ等人間の弱さを肯定する自分の慾望や力を自然だと思うから。かくて自分は自分を強い人間だと思って居るのだ。自分の慾望や力を強いと思えるから。

自分は自然の法則を内に感ずる事によつて又自分のライフの凡ての活動が自然の法則を表わす事によつて、即ち自然の法則を一番いい意味に生かす事によつて自然を知つて行く気がして居る。別の言い方をすれば全ての自然さを本統に内に自覚する事によつて自然を知つて来て居る。自分は科学的にや哲学的に自然の法則を知らない。自分が自然を客観的に説明出来ないのは、その法則の凡てを智解的に漏らさずに云い尽せないのである気がする。しかし只自分の意志や慾望を感じる事によつて自然を見ないでしまえないのを感じる。自分が抑え切れない或る執拗な自分の慾望を感じるとどうしても自然が目について来るのを感じて居る。その慾望をかなえて行くには自然を知つて行く事の外ないからという気がする。そうしてそ

の全く孤独なる慾望は自然を見出してそれに根ざさないでは耐まらないからだという気がする。この慾望がほんとに生きて行くには自己の内の凡ての素質や性格とこの慾望が本統に調和されなくてはならない。そうしてこの調和は只内に自然の法則を自覚する事によるのみ外ない。

ここに於てのみ自分は自分の意志や慾望と自然の意志や慾望との調和を感じ得る。これは自分の意志や慾望を見る事によって又感ずる事によって、凡ての自然さが真に内から知られて来るからであると自分は思つて居る。あらゆる自分の触れる凡ての物事に真に内からその自然さを知る事のみ真に自然の意志や慾望を内から感じられる。

そうしてここに於てのみ自分は自分の慾望や意志に力を感じ誇りと権威を底から感じ得るのだ。凡ての苦しみにも淋しさにも只この事を底から自覚する事によって打ち勝ち打ち勝ちして進み得るのだ。

自分は自分の製作によつて意識の育つのを感じて居る。自然に対する智恵の深くなるのを感じて居る。自分にとって製作慾程純粹なものはない様な気がする。一番率直に自分のあらゆる本能の慾求するものを慾求するのは自分にあつては製作慾である。製作慾は自分の全人格的な智慾だという気がする。

自然は山や草や石ではないと自分は思う。山や草や石がその時そこにそつしてあるその意志とその力とであると自分は思つて居る。そして自分の製作はその意志と力とに自分の全意識を働かしてぶつかり取り組む事によつて自分の智恵の眼が開かれて行くのだと思つて居る。そして自分の内の意志や力がその事によつて大きくなつて行くのだと思つて居る。そしてこの事は只山や草や石やを本統に一生懸命で飽くまで見て行く事による外ないのを知つて居る。内の慾望から何処までも忠実にこれ等を描く事の外これらからその事を知る事は永久に出来ないので自分は信じて居る。自然是山や草や木にはなく只真に孤独なる個性ある人の眼にのみある気がする。少なくともそういう人のみ自然を本統に知つて自然とともに

その生涯をする事が出来ると思う。

自分は自然を本統に知るの外、眞の自覚の出来ないのを信じて居る。眞の自意識は自然を知つてからでなくではないものだと思つて居る。自然を知らない自覚や自意識は根のない木草の様なものだと思つて居る。そうして又この自覚のない人々の言う自然や人類という言を信用しないのである。自然を知る事によつてのみ人間はその自我を明らかに知り得る。認め得る。自己の中の凡てがほんとにその本然の性質を明らかにして来る。そうしてそこに本統に強い調和が出来て来るのだ。眞にここに於て人間はその自我を知り得るのだ。実在として、自我の底から自我を認め得るのだ。凡ての他でない自我を見得るのだ。そして、同時に凡ての他を真に明らかに知り初め得るのだ。ここに眞に個性と創造とがあるのだ。この個性の芸術のみ真に独創オリジナリティある芸術である。眞に人類的な芸術である。凡てにめげる事のない眞に孤独な独歩な芸術である。ここに行くの外凡ての芸術は駄足である。芸術とは云い得ない。

自分は自分の今の現状が益々はつきりして来るのをこの頃日毎に強く感じて居る。自分は自信を強くすると同時に自分の現状の不満をはつきり強く感じて居る。そうして前より更に自分の将来を面白がつて來た。自分の慾望の育つばかりなのを感じて居る。自分は色々の点で益々自分の将来を楽しみにして居る。これを思うと自分は何とも云えない気がする。自分は自分の道がどんどん開けて行つて呉れる事を自分の力と自然に感謝しづに居られない。愚劣なるものが榮ゆる時自分は自分の画を見て心からほほ笑み得る。そうして自然を思う。そうして自分は淋しい微笑を浮べる。自然の前にはいと微なこの自分の画に、彼等は何万年経つても入り得ないのでないか。

愚劣な彼等の絵を見た自分は心から自然という事が云いたくなつた。自分は批評をする御約束をしたが自分の内は今それをする気になれない。そうしてこの事々を心から云いたくなつた。實に、彼等は自然を

描いたつもりで居る。彼等は彼等の仕て居る事を正しいと思って居る。そうして、得意になつて居る。

最後に自分は耶蘇^{ヤソ}の言を引いて彼等に送ろうと思う。二千年前自然は彼にこの大きな言を曰^いわした。自分はこの耶蘇の言に真に力と権威を感じて居るのだ。

「偽の予言者を謹めよ、彼等は綿羊の姿にて爾曹^{なんぢら}に来たれども内^{うち}は残^{あらき}狼^{おおかみ}なり。これその果にて知るべし。誰か荊棘^{いばら}より葡萄^{ぶどう}をとり蒺藜^{あざみ}より無花果^{いわほく}を採る事をせん。凡て善樹は善果を結び惡樹は惡果を結べり。……我を召す者は主よ主よという者^{じよ}尽く天国に入るに非ず。唯これに入るものは、我が天に在す父の旨に遵^{したが}う者のみなり。その日我に語りて主よ主の名に託りて鬼を追い、主の名に託りて多くの異能を行ひしに非ずやというもの多からん。その時彼等に告げて我れかつて爾曹を知らず惡をなす者よ我を離れ去れと云わん。これの故に凡て我がこの言を聴きて行うものを磐^{かた}の上に家を建てたる智人^{ちじん}に譬えん。雨ふり大水出で風吹きてその家を撞てども倒るる事なし。これ磐を基礎となしたればなり。凡て我がこの言を聞きて行わざるもの砂^{なづか}の上に家を建てたる愚なる人に譬えん。雨ふり大水出で風吹きてその家を撞てば終には倒れその傾覆^{ひょうふく}大いなり。」（馬太伝七章、自十

五節至二十七節)

自然是只^{いだら}徒に彼を呼び讃えるものを祝しはしない。彼等は古の偽の予言者が只主の名によつて鬼を追い教えを垂れ異能をなしたのを誇る様にその才能を以て自然を知りつくしたと思って居るであろう。しかし終に自然是永久に、吾彼等を知らず、惡をなすものよ吾を離れ去れとというであろう。

自然是荊棘に葡萄を果らせはしない。蒺藜に無花果を果らせはしない。自然是祝すべき人を知つて居る。眞にそれが自然なのである。意志なのである。力なのである。（一九一三・一〇・二七）

SAMPLE
Sheet-SimScrip.com